

BOOK Review

標準組織学 総論/各論 第6版

評者

内山 安男 順天堂大学老人性疾患病態・治療研究センターセンター長

藤田・藤田の『標準組織学』は、総論と各論からなる大冊です。教科書は、その時点で科学的に事実と認められている事象を基に書き上げることが必要です。これを徹底すると、教科書ほどつまらない読み物はありません。しかし、個人で書き上げる教科書は、事実に基づく記載に独自の味付けをすることで面白くなると考えられます。今や故人となられた藤田恒夫先生と藤田尚男先生の手による『標準組織学』は、その典型であると思います。

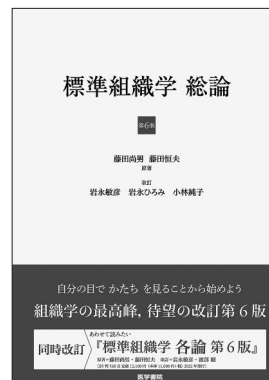
藤田恒夫先生が本書第4版の執筆時、岩永敏彦先生に多くを依頼されていたことを記憶しています。版を重ねるごとに、岩永先生の免疫組織細胞化学の技が随所にちりばめられるようになりました。岩永先生は、藤田恒夫先生の下で、免疫染色を武器に消化管をはじめさまざまな領域のペプチドホルモン産生細胞(脳腸ペプチドホルモン)の研究を進めてきました。その後、独立して北大に移り、獣医学部、医学部と経験され、第5版で『標準組織学』の改訂者になられています。本書はフォローしている論文の数だけでも膨大です。この5~7年間で、新たに加える事項と切り捨てる事項を調べるだけでも大変な作業です。藤田恒夫先生は科学者であるとともに文筆家でもあり、非常にたくさん本を世に出されました。岩永先生も形態関連の本を出版されていますが、筆まめな先生でないと、この大著を仕上げるのは至難の業かもしれません。

第6版の改訂では章構成は変わりませんが、内容は、かなり踏み込んで手を入れられています。岩永先生は総論

の序で、「形態を主にした研究はdescriptive(記述的)で物事の本質に迫ることができず、mechanistic(メカニズムを解明するもの)な研究より低くみられる傾向にある。しかし、現象や形態像を正確に記述することこそが医学の基本である」という趣旨のことを述べられています。本書の電子顕微鏡像、光学顕微鏡像、免疫組織細胞化学的染色像は、どれをとっても美しい像ばかりです。これは科学的な思考力を要求される若き学徒にとって、重要な刷り込みになります。美しい形態を見ると、細胞の中の小器官が何かを語りかけてくれるような、そんな感覚にとらわれます。これが組織学学習の第一歩であると思います。

第6版では、共著者の方々の特徴も十分に反映されています。読みやすい、わかりやすい、さらに高度な内容も含む教科書を一人で作り上げることは、不可能に近い話です。本書も、総論では岩永ひろみ先生、小林純子先生が、各論では渡部剛先生が共に改訂者となっています。そして諸所で素晴らしい仲間の手による章もあり、内容をより豊かにしています。

本書は、組織形態学に分子細胞生物学的要素を随所に取り込んだ教科書です。若い学生が本書を読み込むことで、形態科学の歴史的な背景を知ることができ、読み物としても一級品です。学部学生のみならず、院生や若き研究者にとっても手元に置いておきたい教科書の一つです。



藤田 尚男, 藤田 恒夫 原著/岩永 敏彦, 他 改訂

総論: B5/376頁/2022年/定価 9,020円(本体 8,200円+税 10%) / ISBN978-4-260-04349-6 / 医学書院刊

各論: B5/568頁/2022年/定価 12,100円(本体 11,000円+税 10%) / ISBN978-4-260-04132-4 / 医学書院刊